

あんげろす

退職の年 2020年3月

播本秀史

この3月、明治学院大学を退職しました。23年間、勤めました。それ以前の都立高校20年を加えると43年間、教師をしていたこととなります。高校教員時代に9年間の大学院生活も送りました。今の制度では考えられない牧歌的な時代だったのですね。明学での最終講義を2月22日に行うことができました。その後すぐにコロナウィルスへの警戒が強まり、他の先生方の3月初旬の最終講義は全てキャンセルとなりました。かつての東日本大地震の時と同じように卒業式や入学式も開催されませんでした。それどころか、4月から始まる授業も日程が延期されたうえにオンライン授業となりました。「いい時に退職されましたね、対応に四苦八苦しています」と現役の先生から羨ましがられました。非常勤でオンライン授業と格闘していますが、専任とちがってたしかに精神的、時間的にゆとりはあるようです。

キリスト教研究所の所員となったのは奉職2年目からです。22年間お世話になりました。印象深いのは、ブラウン館での一泊研究会です。研究発表の後の深夜に至る歓談は、実に豊饒な時間だったと、今、思い返しています。残念だったのは、キリ研を母体としたキリスト教文化関係の独立大学院構想がまぼろしに終わったことです。

(次頁へ続く)

第82号

2020年7月



当時、私は主任で中山弘正所長の時代でした。付随して宗教科の教員免許取得の復活も成りませんでした。しかし、「明治学院研究」と称して教養教育センター枠の授業を始められたことは嬉しいことでした。これは、橋本茂所長の時代で、私は主任でした。所長時代は、その継続と主にキリスト教と文学関係に力を注ぎました。また、明治学院創立150年記念に『境界を超えるキリスト教』を発刊できたことも嬉しいことでした。これは私の所長時代から企画され、司馬純詩所長の時に刊行されました。司馬先生が編集の労をずっととられました。現在のキリ研は東アジアのキリスト教をテーマとして、徐正敏所長を中心に活発な展開がなされています。また、新しく所員になられた先生方はおそらくこれからのキリ研を担われる方たちで、キリ研の未来に希望が灯されています。私もそうでしたが、それぞれの学部、センターでの仕事に忙殺される現実を抱えています。しかし、キリスト教の意義を問い続け、発信する機関としてキリスト教研究所は明治学院大学に不可欠な存在です。今後のますますの発展を祈っております。ありがとうございました。

はりもと・ひでし（本学名誉教授・名誉所員）



『境界を超えるキリスト教』 明治学院大学 150 周年記念出版 キリスト教研究所編、教文館、2013 年。

ジュネーヴの二つの椅子

李 省展

かれこれ 10 数年前になるだろうか、ジュネーヴ近郊にある WCC 図書館にて資料調査をする機会があった。まだ雪の残る寒さが身に染みる季節であったが、自由都市ジュネーヴを肌身に感じながら過ごした日々が蘇る。

周知のようにジュネーヴには国際機関がひしめいている。世界は今、新型コロナウイルスの流行に苦しめられているが、これと正面から立ち向かっている WHO もジュネーヴが本部だ。ILO や赤十字本部もジュネーヴにあるが、かつての新渡戸稲造が活躍したヨーロッパ国際連盟本部もあり、現在は国連ヨーロッパ本部となっている。ニューヨーク本部は安全保障など政治的な課題の解決を模索する性格が強いのだが、対照的にヨーロッパ国連本部は人権など、より社会に密接な課題を議論する場である。そのすぐ隣には国連高等難民弁務官事務所が位置している。緒方貞子の活躍した場であったが、彼女は現場主義に徹し、ジュネーヴ滞在は限られていたという。

ヨーロッパ国連本部の真向かいに、高等難民弁務官事務所と通りを隔てる小さな広場に巨大なオブジェが存在する。その広場に立ち寄ると見上げるほどの巨大な椅子がそびえ立っている。それは現代世界のあり様を象徴するダニエル・ベルセによる巨大な彫刻作品である。しかしその椅子は一本の脚が欠け、微妙に傾いている。クラスター爆弾に抗議するための作品ということだが、いかにも座りにくそうなこの椅子はまさに現代の世界の不安定さを象徴するかのようでもある。

国際機関の多さはスイスが中立国であることによるといえるが、近代以前のジュネーヴの歴史も大いに関係している。自由都市ジュネーヴには多くの政治・宗教的難民を受け入れてきた。レーニンがレマン湖のほとりに滞在中『共産党宣言』をロシア語に翻訳したという。そのレマン湖を眺めながら、小高い丘へと向かう、そこは旧市街だ。中世のヨーロッパを思わせる狭い石畳の坂道

を登っていくと、ジャン・ジャック・ルソーの家がある。後にフランスで社会契約論（1762）を出版した若きルソーはジュネーヴで暮らした。手工業を営む家系であったという。フランスの改革派グループ・ユグノーの背景がそこから想起される。フランスでカトリック勢力から迫害を受けた多くのユグノーが国外へ脱出した。その際に多くのフランス系難民をジュネーヴは受け入れたのだ。フランスの中産階級が一举に消えてしまったといわれるほどであるが、多くの手工業者がジュネーヴに移り住んだ。このように難民がまさにスイスの時計産業発展の土台を創ったのであった。

ルソーの家からしばらく行くと広い芝生のキャンパスを持つジュネーヴ大学に至る。その一角に有名な長さ100メートル高さ10メートルにわたる彫像・宗教改革記念碑がある、中央にジャン・カルヴァン、ジョーン・ノックスなどが並んでいる。そこから上り坂を上がっていくと、頂上の広場に到達するとサン・ピエール大聖堂が姿を見せる。カトリック教会であったが、改革派が占拠しプロテスタント教会となった。1536年から紆余曲折があったものの四半世紀にわたり、カルヴァンはここで説教をした。堂内に入り螺旋階段を上ると小窓からレマン湖と市街地の360度のビューを楽しむことができる。堂内にはカルヴァン愛用の椅子が展示されていた。それはさりげなく置かれた何の変哲もない古びた椅子であり教皇座とは対照的である。今でもこの古びた椅子にプロテスタントの神髄が宿っているような思いがしてならない。

翌日がちょうど日曜日なので、カルヴァンの教会に出席することにした。会衆はフランス系老人たちに占められていた。高齢化が顕著である。そこでは二つの初体験があった。一つがプルピットと称される説教壇から中空から牧師が説教する光景に遭遇したことである。また一つはその日はたまたま聖餐日と重なり、生まれて初めて白ワインによる聖餐式に預かったのであった。

会堂を出てふと見るとジョーン・ノックス記念教会がすぐ横にあった。ノックスはカルヴァンとともにジュネ

ーヴで活動しその後、スコットランドに戻りエディンバラを中心に活動しスコットランド長老教会の礎を築いたのである。礼拝時間がずれていたので参加することとした。礼拝は英語で行われ、中年の牧師が一人で司会しながら、礼拝を進行していた。ジュネーヴの国際機関で働く人が多いような印象を受けた。これまた人生で初めて、日曜日に二度午前礼拝を経験することとなったのであった。そこから数十メートル離れたところに国際宗教改革博物館が、1536年の宗教改革宣言の地に鎮座している。世界のプロテスタントの歴史が示されている。またフランス語で記されたカルヴァンの書簡を見ることができた。近くのレストランで遅いランチを食しながら、改革派・長老派の歴史にふと思いを馳せる。ジュネーヴ、エディンバラ、アメリカ東海岸から西部へ、そして太平洋を越えて東アジアに。さらには明治学院と提携校であるソウルの崇実大学校へとその流れは継承されている。その源流こそジュネーヴにある。

い・そんじょん（協力研究員）

→ダニエル・ベルセ作
『壊れた椅子』
(Wikipediaより転載)



←サン・ピエール教会からの眺め（教会HPより転載
<https://www.saintpierre-geneve.ch/>)

筆者は、日本におけるキリスト教受容をテーマに細々と研究してきた。歴史研究は過去の問題を分析するのがその目的のように考えられがちであるが、現代の問題を抜きにして歴史研究はできないと思われる。現在世界はコロナウィルスの問題で、大変な時代を迎えている。歴史は繰り返す、天災は忘れた頃にやって来るというように、赤痢、ペスト、スペイン風邪、サーズというように、さまざまな伝染病、感染症に人類が苦しんできた。今回のウィルス禍もあつという間に世界に広まった。当たり前のように暮らしてきた日常が奪われて行く。教会の礼拝ができない。これは根本的に私の生活を変えてしまった。この時期ステイホームということで、家に閉じこもる中で、今まで専門外の書はなかなか読めなかったが、ここに来て、今まで読めなかった書を色々読むことができたのは幸いであった。カミュの『ペスト』、この書の最後で、「ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもない」、再びペストが鼠をも呼びさましてやって来るであろうと述べている。ワクチンと薬が出来てこのウィルスを乗り越えられたとしても、また違ったウィルスがやって来ると思われる。

イタリアのパオロ・ジョルダノーが、『コロナの時代の僕ら』(早川書房)という手記をまとめた。ローマの非常事態下で今春の3月に書いたもので、著者は「コロナウィルスが過ぎたあとも、僕が忘れたくないこと」と題し、コロナが「過ぎたあと」復興が始まるだろう。「だから僕らはよく考えておくべきだ。いったい何に元どおりになってほしくないことを」という。私たちは感染症、災害をすぐ忘れる。1918年から1920年に流行った、スペイン風邪が日本でも猛威をふるい、45万人も死んだ。このウィルス禍の前にどれだけの人々がこの事を知っていたらどうか。私たちはすぐ忘れる。私たちは、歴史学を学ぶ者として、このウィルス禍を歴史的に考察して、

次世代につなげなければならない。

さて、キリスト教史のことに戻るが、日本のキリスト教は、開港都市に受容され、続いて大都市、地方都市、そして農村地域に行き渡った。昨年10月末『長谷川誠三―津軽の先駆者の信仰と事績』(教文館)を出版した。この書は、農村にキリスト教が受容される過程において、メソジスト教会の信仰を受け入れた長谷川誠三という事業家との出会いがあつて追いかけることになった。明治10年代のキリスト教は、都市に農村に新しい地盤を求めて躍進した。しかし、明治20年代になると天皇制の確立と共にキリスト教は相いれないものとして圧迫されるようになっていった。その典型的事件は文部大臣森有礼が暗殺された事件であり、内村鑑三不敬事件であった。これ以後日本のキリスト教は太平洋戦争に至るまで厳しい社会的条件と対決しながら教会形成をせざるを得なかった。

キリスト教史は、救済史を志向しなければならないと考える。教会は十字架と復活を信じる群れである。教会史は、キリストを信じる群れが主から託された宣教のわざをどのように行なってきたかを辿ることである。と同時に将来どのような教会を目指すかを指し示すものでなければならない。長谷川誠三は、制度的教会であるメソジスト教会から非制度的教会であるプリマス・ブレズレンに離脱した人物である。ために弘前女学校の設立者であったが、本多庸一に変更された。非制度的教会は、日本のキリスト教をみると戦争に対し少なからず抵抗者を生み出してきた。その代表はホーリネスの群れであった。プリマス・ブレズレンは、ロンドン近くのプリマスから生まれた宗派で、聖公会から脱した派で万人祭司主義を貫き、教職と平信徒の区別がない。教会制度と教職性を否定、礼拝は聖霊に導かれながら、聖餐を毎主日ごとに行ない、信者であれば誰でも説教ができるのである。そして、聖書の深い学びがある。現在日本では同信会といわれ、1888(明治21)年秋H.G.ブランドという人が、プ

リマス派から何等の支援もなく自給伝道者として来日した。

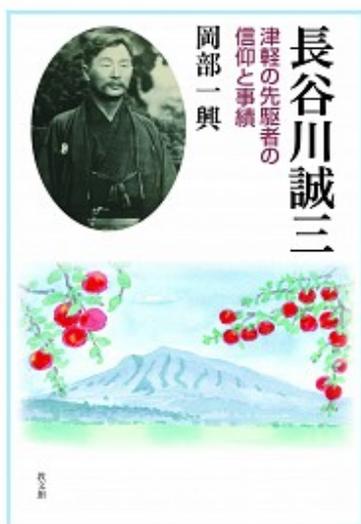
長谷川誠三は、「右の手のすることを左の手に知らせてはならない」(マタイ6:3)という生き方をした人だった。それ故に伝記を編纂することに躊躇したが、彼の成した事業のスケールの大きさと先駆的な役割をみると、彼から学ぶべき点が多くあったので取り掛かったのである。筆者は彼を顕彰するために、讃美するために評伝を書いたのではなく、埋もれた人物を多くの人に知ってもらいたいので取り組んだのである。すでに私に与えられた字数を超えているので、残念ながら「長谷川誠三」の評伝のアウトラインを記すことは出来ない。関心のある方は、この書を読んで頂くことをお願いする次第である。

おかべ・かずおき(協力研究員)



←『コロナの時代の僕ら』パオロ・ジョルダノ著、飯田亮介訳、早川書房、2020年。

→『長谷川誠三—津軽の先駆者の信仰と事績』岡部一興著、教文館、2019年。



雑録

篠崎 美生子

大学の授業は春学期のおわりまではオンラインで行うこととなった。学生の入構も当面禁止、教員も原則として自宅から授業を配信している状態である。私も初めはzoomもteamsもちんぷんかんぷんだったが、授業開始から7週の今、なんとか画面を介しての授業や会議が果たせるようになってきた。尤も授業の大半は、パワーポイントにナレーションを入れた簡易動画を使つてのオンデマンド形式で、学生には毎回、manabaを通じてリアクションペーパーを出してもらっている。

驚くべきことに、このリアクションペーパーの水準が例年よりも高い。教員としては、いったい対面授業とは何だったのかと寂しくもあるが、おそらく、PC(またはスマホ)の画面を通してのみ大学とつながっている今の学生たちは、その小さな画面を一生懸命見つめ、耳を澄ませることで、「学生」としての自負を保っているのだろう。そう思うと、画面にむかうこちらの責任も重く感じられ、対面授業の時以上に、パワーポイントを工夫しようと気合を入れる。そうした相乗効果から、災い転じて福となった側面があるのに違いない。

ただ、この種の気合が昂じて、時には神経をすり減らす局面を生むケースもあるとも聞く。つまり、より完璧で雑音などのミスのない授業や会議が求められることがあるというわけだ。これはリモート初心者にとってはドキリとする話である。私にも「発言の時以外はミュートにする」「発言の時はカメラをオンにする」などのルールをつい忘れてたり、Wi-Fiの電波が急に弱くなって、資料の「共有」がうまくいかなかったりすることがあり、やり直しのきかないリアルタイムの授業や会議の時は、いつも汗だくだ。

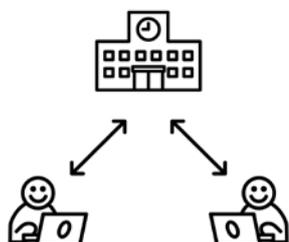
私のような人は、本学にも多いことだろう。私たちの多くは、今回のコロナ禍によって初めてオンラインでの業務を余儀なくされ、その際のマナーも学びつつあると

ころである。リモートワークの達人や、そもそもオンラインに抵抗のない若い世代にとってははじれたいことかもしれないが、私（たち）は成長途上なのだ。

そもそもリモートとはいえ、操っているのは生身の人間である。ミスがあれば、まして狭い住宅事情の中での配信に、生活感のある部屋や家族が映り込んだり、洗濯機の音が入るなどというのはしかたのないことだろう。もし、リモートワークの浸透に伴い、そこに完璧を求めるならば、それは、私たちがそれぞれの生身の身体をウイルスから守るために一時的に分かれ分かれに家の中にいるという大前提を忘れ、さらには、生身の身体を以て今も仕事をしている人々——大学では多くの職員さんたち——の存在を忘れる態度にもつながりはしないだろうか……。

幸い私の担当する学生たちは寛容である。拙宅の猫は、私がPCに向かって話しかけているのが妬ましくてならないらしく、オンラインの最中にやってきては、鳴きながらカメラをのぞきこもうとする。ひそかに手で追いやろうとしても動かない。このわがままな生身の身体存在を許し、力のこもったリアクションペーパーを出してくれる学生に感謝しつつ、対面授業再開の日を楽しみに待つことにしよう。

昨年度末を以て定年を迎えられ、このたび巻頭言をお書きくださった播本秀史先生が、名誉所員になってくださったこと、国際学部の久保田浩先生、教養教育センターの吉岡拓先生、中野綾子先生が新たに所員になられたことをご報告申し上げます。大学にとっても研究所にとっても、かつてない状況ではありますが、知恵を出しあって、今年度も歩んでいきたいと存じます。



しのぎき・みおこ（主任）

研究所活動（2020年4月～2020年6月）

新着図書

- ・『福音と世界』No. 4、新教出版、2020。
- ・『福音と世界』No. 5、新教出版、2020。
- ・『福音と世界』No. 6、新教出版、2020。
- ・『福音と世界』No. 7、新教出版、2020。
- ・『賀川豊彦研究』第68号、本所賀川記念館、2020。
- ・『キリスト教文化』第14号（2019秋号）、かんよう出版、2019。
- ・『パトリスティカー教父研究—』第23号、教友社、2020。
- ・『日記文化から近代日本を問う 人々はいかに書き、書かされ、書き遺してきたか』田中祐介編、笠間書院、2017。
- ・『戦争社会学研究3 宗教からみる戦争』戦争社会学研究会編、みずき書林、2019。
- ・『マーシャル、父の戦場』大川史織編、みずき書林、2018。
- ・『上海におけるプロテスタント 現代中国の都市と宗教空間をめぐる変遷』村上志保著、勉誠出版、2020。
（協力研究員 村上志保氏寄贈）



↑『上海におけるプロテスタント 現代中国の都市と宗教空間をめぐる変遷』村上志保著、勉誠出版、2020年。

2020年度メンバー

所長 徐 正敏

主任 篠崎 美生子

所員

教養教育センター：植木 献、嶋田 彩司、田中 祐介、中野 綾子、永野 茂洋、吉岡 拓、渡辺 祐子

文学部：久山 道彦、齊藤 栄一

経済学部：手塚 奈々子

社会学部：坂口 緑、佐藤 正晴、深谷 美枝

法学部：鍛冶 智也

国際学部：久保田 浩、森 あおい

(以上 18 名)

名誉所員

鶴殿 博喜、遠藤 興一、大西 晴樹、小田島 太郎、加山 久夫、佐藤 寧、

司馬 純詩、柴田 有、千葉 茂美、辻 泰一郎、中山 弘正、新倉 俊一、橋本 茂、

播本 秀史、真崎 隆治、丸山 直起、水落 健治、森井 眞、山崎 美貴子、吉田 泰

(以上 20 名)

客員研究員

坂井 悠佳、王 艾明

(以上 2 名)

協力研究員

Andrew H. Ion、李 相勲、李 省展、稲垣 久和、今村 正夫、岡田 仁、岡田 勇督、岡部 一興、

岡村 淑美、柿本 真代、勝俣 誠、加藤 拓未、金丸 裕一、木村 一、金 香花、清澤 達夫、

小林 孝吉、齋藤 元子、佐藤 飛文、朱 海燕、徐 亦猛、鈴木 進、高井 啓介、高井 ハー 由紀、

高橋 一、竹田 文彦、崔 善愛、近松 博郎、辻 直人、土肥 歩、豊川 慎、中井 純子、中西 恭子、

西元 康雅、長谷川 美保、裊 貴得、牧 律、松谷 曄介、丸山 義王、三野 和恵、宮坂 弥代生、

村上 志保、村上 文昭、横山 正美、吉馴 明子

(以上 45 名)

教学補佐

高橋 英里

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第82号

2020年7月10日 発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩